『日本渡航記』
セーリス著、村川堅固訳

(1612 年 9 月 22 日

1612 年 10 月 18 日

1613 年 1 月 12 日)

1613 年 1 月 15 日

「…次に投下すると礁にあたる…予等はこゝで三時間可なり勁い暴風と戦つたから、その経験から見れば、さうである。けれども神の摂理と、乗組員の此の危急の際の自發的土食で予等は風難を免れたが、船に漏口が出来たので、予等は終夜又翌日の午前十時まで、始終喞筒で汲み出し、予自身の他、皆交替に働いたが、唯唯浸水の増加を防ぎ留むるに過ぎなかつた。予は或はバンナムへ引還さねばならぬのではないか、さうなれば、予の一行の滅亡であり、日本への渡航も挫折してしまふと大いに悲しんだ。けれども神の恵みと大工等の勤勉とで、漏口は發見されて塞がれた。(p4)」

1613 年 6 月 11 日

「午後三時潮が引いてしまったので更に進むことが出来ず、平戸の手前半リーグのところで投錨した。予は投錨に際し禮砲一發を射たしめた。さうすることが習慣だと土人より聞いてゐたからである。そして暫くの後予はホーイン・サメ（Foine Same）と呼ばれる老王および彼の孫トメ・サメ（Jone Same※Tono Sama の訛り、殿様の意）によつて訪問を受けた。後者は現在當島の太守であり、前記老人、即ち彼の祖父の下にあつて現在この島の支配者である。〔彼等は片舷十乃至十五本の櫂によつて漕がれるボート或はガリ船四十艘に附き添われてゐた。船に彼らが近づいた時、王は彼自身と彼の孫の乗つてゐる二艘以外のすべての船は後になる様にと命じ、彼等二人のみ船へ入つて来た。彼等は二人共絹の長上衣を着、その下にシャツを、又肌は麻布で出来た袴をつけてをり、各々その脇にはこの國の刀を二本差してゐた。その一本は半ヤード、他方は四分の一ヤードの長さであつた。彼らは帯をつけてをらず、その頭の全部は脳天まで剃つてあり、その残りの非常に長い頭髪は後部に束ねて結んであり、帽子も頭布もかぶつてをらず、頭をむき出しにしてゐた。王は七十二歳位の齢で、彼の下に当地を行ふ彼の孫は二十二歳位であつた。彼らは何れもその家老を従へてをり、その家老といふのは、彼らによつて任命され又奴（奴隷）に對し支

配権を有する。彼等が挨拶を行う禮義作法は、彼らの流儀でなされるが、それは斯うである。先づ、彼らはその敬禮を行はんとする者の前へ出ると、彼等の靴（靴下は穿いてゐない）を脱ぎ、それから彼等の右手と左手とを拍ち合はせながら、手を膝の方へ下し、この様にその手を暫くあちこち振つたり動かしたりして身體を屈め、敬禮を受けた者の側から、斜に小股に歩を退け、そしてオー、オーと叫ぶのである。予は彼らのために饗宴と立派な音楽の演奏を用意していた餘の船室へ案内したが、それらは彼らを非常に喜ばせた。〕

彼等は予に歓迎の辭を述べ、親切にして自由なる饗應を約した。予は彼に皇帝の書翰を渡したが、彼はそれを非常に喜んで受けとり、それを彼に説明し得るるアンジ(Ange)※アンジン(按針)が来るまではそれを聞かぬといつた。このアンジといふのは彼らの言葉では水先案内のことであり、この土地でさう呼ばれているアダムス君のことなのである。といふのは彼がオランダ人水先案内としてこの國へ入つて来たからであるが、その船は後此處で破滅に帰した。予は数種の罐詰を硝子器に盛つて王を饗應した所、多大の満足を彼に与へた。又立派な音楽の演奏は多大の喜びを持って受け入れられた。そして彼の別れに際しては禮砲十三發を与へ、又家老の兄弟の別れに際して五發を与へた。

〔彼が岸に着くや否や、彼の權臣等が多くの兵士を連れて船へ入つてきた。相当の位のものは皆賜物を携へて来た。即ち、或者は獣肉を、或者は野禽を或者は予等が曾て見た中で最も大きな最も肥えた野猪、又或者は果物・魚等々。彼等は予等の船を大いに賞嘆し、いくら見ても見足りないかの如く振舞つた。(ｐ103,104)」

1613年9月8日

「予は駕籠に乗りて、(皇帝が宮廷を構ふる)駿河の城へ運ばれた。予の商人其の他の者は、予の前に賜物を有つて伴をした。城に入つて予は三つの跳橋を過ぎた。其の各に一隊の番兵が居る。甚だ立派な大石段の一對を登つたところで、予は二人の厳格で風采よき人に迎へられた。其の一人は皇帝の秘書官上野殿(本田上野介正純)で、他の一人は水師提督兵庫殿(向井兵庫頭政綱)で、両人は予を畳敷の立派な室へ案内した。予は畳の上に胡坐で座した。間もなく両人は予を間に挟んで謁見の間へ案内した。そこには皇帝の玉座があつて、彼等はそれに對し予に敬禮するやうにと頼んだ。玉座は金色の布で張られ、高さ五尺ばかり、背の方と両側は、大層華麗に装飾してあるが、頭上に天蓋はない。次に両人は以前彼らが座して居た場処へ帰つたが、そこに十五分位待つた処で、皇帝出御という聲が聞えた。次に彼等は立ち上り、予を間に挟んで、皇帝の居る室の戸の処に予を案内し、予に其の内へ入るやうに身振りをした。しかし彼等自身は其の中を覗くことはできなかった。予等の(イングランド)國王からの賜物と、(此の國の習慣に従って)予が自身からして皇帝に差探る賜物とが、皇帝が入り来る前に、前記の室内に、畳の上に整然と置かれてあつた。予は英國風の禮式に従つて、皇帝に進みより、予等の王の書翰を陛下に渡した。陛下はそれを手に

取つて、其の額の方へ頂き彼の背後に可なり隔たつて座つて居た通辯に命じて、船長アダムスをして予に對して、遠路ご苦労、よくこそ来られたどうぞ一両日休憩せられよ。其の間にイングランド國王への返翰ができるであらうと言はせられた。(p167,168)」